



大正期の新聞労働者のゼネスト

『ローテ・フアーネ』

(1) 相 場

史談会開催日

昭和43年(1968年)4月24日

■ 語る人

和田 栄吉 氏

(フォト・タイプ社社長)

■ 【和田 栄吉氏略歴】・

- ・明治27年長野市に生る。昭和7年満州奉天に満州共同印刷を設立、取締役工場長となる。昭和12年北京新民印書館の設立に参画、常取締役となる。昭和22年東京印書館の設立に参画、専務取締役、副社長を歴任。昭和27年フォト・タイプ株式会社を設立、取締役社長に就任、現在に至る。
- ・また大正9年正進会による東京全市の新聞社スト、大正10年の新聞社散発的ストライキなどに関係し印刷労働運動のために活躍した。大正14年の第5回メーデーではその司会者(議長)に推され、正進会(新聞工組合)と信友会(印刷工組合)が合同して東京印刷工組合となるに及んで、その指導的立場に立って働いた。

史談会ということで歴史を話していく上には年代をきちんと説明しなければならないが、実は記録的なものが何も無いのである。私自身が大杉栄の下で無政府主義運動をやり、その一方で印刷の仕事をやるという状態で殆ど15年間というもの、住所不定、さらに一年の3分の1はブタ箱に入っていた。したがってその頃のことを記録しておくことはま誠に危険な話で、何も記録しないという長年の習慣から年代がはっきりしていない。それからこれから話そうとする活版屋の話と言うのが飲む、打つ、買うのいわゆる道楽者の話になると思うので、これにはとくに年代は必要ではないであろう。年代が明確でない点はそういうことで了解頂きたい。

私は明治27年生れの午(うま)年で人間が騒々しく出来ている傾向にあるらしく、これまでに自分でも呆れ返るほど色々なことをしてきた。

信州・長野で生れて小学生の頃東京へ出てきた。八丁堀に住んだのだが、ご承知のようにあの周辺は三角と称するところで、あそこらで育つ子供というものはろくなことを覚えなない。ベーゴマをやるとか、焼きそばを3杯食べて1杯しか金を払わないとかいった悪いことばかりやる。その頃そういう子供のことを「あのガキ、ちゃくれたガキだ」という言葉で呼んだが、私などはその「ちゃくれたガキの」代表のようなものであった。

そのうちに小石川のほうに引越し、白山に京北中学というものがあり、そこに入った。3年の2学期の初めにあまり悪戯が激しいので退学させられ、共同印刷の徒弟養成所へ入ったわけである。ここには1年ぐらいいて、いわゆる文選なるものを習ったんだが、その頃八丁堀の遊び仲間株屋の小僧に入っていたのが1人おり、それに誘われて株屋の小僧になった。株屋の小僧になっても正直な商法

などやっておらず、いわゆるウスバリと言って、時分の乏しい銭でカケをするのだが、ちゃくれた子供のせいかそれが儲かるんで、このことが私の将来に非常に大きくプラスしたということが言える。というのは、長い間社会運動をして未決から出てきたり留置場から出てきたりした場合に、食うには困らないものの銭がない。そういうとき私は、長島五郎さんの姉のつれあいで谷田さんという人がいたが、谷田さんのところで真面目に働き、20円ぐらい稼ぐ。そうすると今度は20円持って兜町へ行き、直取引をして上手くいくと50円くらいになる。だから社会運動をやりながら相場に手を出して行くというのが私の生活の支えになっていた。大正11年か12年に直取引が無くなると、今度は蛸殻町へ行き米の相場に手を出して、そういうことで小遣いだけは稼げたわけで、小遣いを持っているから留置場に引っ張られても割と驚かなかった。

(2) 歌 沢 節

大正5年の暮頃に、東京日日新聞、今の毎日新聞だが、そこへ文選で入ったが、何しろ1年ぐらしか文選はやってないから余り仕事は出来ない。それで仮名付きの活字ケースを作るからそれを手伝えと言われたが、今の漢字の配列でも大変なのに、仮名付き漢字の配列となるとこれはうるさい。たとえば「上」という字は仮名がついていなければ一ヶ所ですむが仮名がつくと「じょう」「うえ」「かみ」「うわ」「しょう」「あが」「あげ」と7つもあり、これらのものをどれをどこに置くかということになると大変な仕事になる。それでもなんとかやり遂げ、その配列表を印刷して全国の新聞社に1組10円で売る、というような悪知恵も働かせたわけである。それで、2、3年の小遣いには困らなかったのだから相当儲けたようである。

そのような博奕的なことになると割合にアイデアが働き、自分でも感心したことがあった。留置場に入れられた時一番いじめられるのは博奕で入った奴なんだが、大体博奕であげられて入ってくる時間は夜の11時、12時。寝ているところを起こされるものだから、「このヤロー」ということで一晩中立たされっぱなしになることもある。私は政治犯で入っているものだから中でも威張っていて、割合いとそういう博奕打の連中の面倒も見たが、そうすると娑婆へ出たらぜひうちへ来いと言うような誘いが東京中の親分からかかって、実際よく居候したものである。留置場の中で栄養不良になっているものだから栄養をつけ小遣いを貰って、また元の通り社会運動をやるというようなことであった。



兜町へ行っている頃に子供のくせに歌沢というのを習ったことがある。約10年習ったが、歌沢などというのは年寄りがやるもので小僧がやるものではないのだが、それを習いに行っているうちに偶然に鈴木正平さん（中屋印刷）の二号と一緒にになった。「私の主人も印刷をやっている」と言うので色々聞いてみると、一度主人に会ってくれと言う——、それが私が鈴木さんのところへ行くきっかけになったわけである。そのうちに中屋でストライキがあり、四谷荒木町の妾宅にみんなが押しかけて来るという時、私は待合の前で裸になって、「俺を踏んずけて入れ」などと啖呵を切り、とうとう追い返してしまったことがあった。鈴木さんはそれを大変買ってくれて、私にしょっちゅう来い来いということで、親しくなってしまった。

鈴木正平さん、金羊社の山本駒之助さん、山本インキの山本久次郎さん、それから林栄社の林栄三さんの4人はグループで、このグループは、向島や大森へ行ったら裸踊りをする会をやっていたが、お前も演芸の心得があるからグループに入れと言われ、私も一緒にそういうところを歩いたような昔である。

大正15年秋に改造社の円本が出て、昭和になって円本ブームが始まったということだが、その頃は不景気の真最中で、ほとんどの印刷屋が潰れ行く。円本が出るからいいだろうと言っていたが、印刷は潤っても組版はちっとも良くならない。それで活版屋が儲からないのは鉛で活字が作ってあって印刷すると減るから儲からないんだ、と言うような極めて素朴な考え方で鈴木正平さんのところにはガラスの活字とか、瀬戸物の活字などが集まってくる。ガラスの活字などはインクが着かないから全然使い物にはならない。そのうちに林さんのところで綱質活字は鉛ほど重くはないので、機械に組みつけて叩いて締めると、真ん中から跳ねてしまう。それでせっかく林さんが考えた綱質活字もう上手いかず、結局仮名だけを綱質活字にし漢字は鉛を使うということになったが、ある程度上手いくものの、今度は解版の時に分けるのが面倒だということが問題になってくる。そうこうするうちに活字の1回使用ということを林さんが言い出したわけである。



(3) 赤旗の歌

栄光社の社長に下中弥三郎さんという人がいたが、この人は労働組合運動の先頭に立ったり大衆文学全集を出したりで変わった人で

あった。一度会ってみたいと思い、鈴木さんも含めて3人で会い昼飯を食ったことがある。その時に鈴木さんが言ったのは、いかに活版印刷の組版というものが生産的な仕事か、と言うことを強調していた。下中先生はそれに対して、活版工場は随分見るけれども、大日本だの凸版だの共同だのと言ったところで、それは活字がたくさんありケースが並べてあって、人間がウヨウヨしている。結局町工場を2ヶ所に集めたようなもので、近代的な産業にはなっていない、と言われたと思う。そうしたら活字の1回使用の話が持ち出され、これは面白いということになった。

ところが共同印刷先代社長の大橋さんはそのことを既に知っていて、共同から1回使用というものを始めた。大橋さんはそのことを印刷雑誌に書いて、共同の活字は一度使うと全部潰してしまうからよそに比べて綺麗である、というようなことを言っていた。活字の1回使用はそのようにして始められたのだが、このことは関東大震災を境に、常識的なことになっていた。

余談になるが、関東大震災については面白い記憶がある。大震災で桜橋の下の川は綺麗になってしまっていて砂蚕（ごかい）がいた。砂蚕堀のばあさんがいて掘っていたところが、熊手に何か引っ掛かって重くて上がらない。なんだろう、なんだろうと言っているうちに、それがその境界の活版工場で焼けた鉛が全部流れ込んでいたことがわかった・大きなものになると5、6人かかっても上がらないような鉛の塊がたくさん桜橋の下から出たというようなこともあった。

話は前後するが、関東大震災の翌年のメーデーには、私は司会者（議長）に推された。そんな派手な仕事は嫌だと言ったが、私がなければ亡くなった鈴木文治さんがやるようになるというので、文治がやるくらいならおれがやろうということで引き受けた。引き受けてはみたものの山王台を出るときに、溜池署の特高が私が司会者だということを知らないで溜池署へ引っ張っていった。見ていたものは司会者が引っ張られたというので、行列を山王台から出さない。結局5分ほどゴタゴタして遅れ、私は山王台に行って号令をかけて引っ張ってきたが、このときも私はインチキ性があったのか、官房主事を騙してその頃のデモでは歌えない「赤旗の歌」を初めてデモ行進で歌わせたこともあった。

この頃争議は随分やった。話はまた前に戻るが、大正8年の新聞社のストライキの時の組織が一番最初は憲政会の院外团的なものに作られたものだが、それにしても自然発生的に急に出来上がってしまった。憲政会代議士の横山勝太郎氏を会長にして、顧問に加藤勘



十君を引っ張ってきてやったわけだが、新聞が3日も4日も止まるということは大変なことで、横山さんはとうとう逃げ出してしまった。加藤君は警察に引っ張られてしまった。争議団は日本橋に集まっていたが路頭に迷うという状態になり、結局第1回のストライキは新聞社のほうが新聞連盟なるものを作り、負けた形になった。翌年今度は革新会なる組合を作り、一切横山のようなダラ幹をなし始めて、これは散発的なストライキになった。それぞれの会社の事情によってストを打つということだったが、報知新聞の時には工場中の活字ケースをひっくり返してしまった。この時の弁護人の布施という人は柄のないところに柄を削るという言葉通り、上手いことを言って弁論したものだ。

(4) アナーキズムへ

報知新聞社で活字ケースを全部倒してしまったことは、暴行障害毀棄という罪名であったが、この布施という弁護士は器物毀棄にはならんと主張した。活字というものはこぼれても最初の活字と同じだ、だから毀棄にはならない、ということで結局6人ぐらいが1年半食らったくらいであった。

これ以後のストライキは賃金値上げという要求はほとんど無かった。大部分が給料遅配反対、首切反対という争議ばかりだった。だいたい給料が3ヶ月ほど遅配になっている印刷工場というものは機械にせよ活字にせよ2つや3つの抵当に入っているわけで、そこへ乗り込んで行ってオヤジさんに話して、どっちみち金貸に取られるんだから工場の人間に払いなさいと言って説いたわけである。抵当に入っているものを売るということは法に引っ掛かるのであるが、引っ掛かるときは俺が引っ掛かるから黙って見ている、と言い包めて活字を売り給料を払ったものである。その頃の警察も、大資本のところへは味方したが、活字を売らなければ給料を払えないというような小さな工場は問題にしていなかった。カマスを持ってきて、ケースの活字をカマスにガラガラとあけるその音が、実に嫌な音で、監房の錠を下ろすような感じがしたものである。

その頃私は下中先生のやっていた「労働週報」という雑誌を出していたが、労働運動の第一線から退き、今度は組合運動ではなく純粋な思想運動として大杉栄のところの「労働運動」を編集することになった。なぜ私が組合運動から離れたかという、今でも場所のはっきり覚えているが、音羽町の護国寺の近くにあった10人ほど



の工場で、4ヶ月給料がたまっていたところがあった。どうにも我慢出来ないということで私が出かけて行って話したところ、主人は奥に引っ込んでいるからよろしく頼むと言うので、例のようにケースをカマスの中にあけたのである。その時分には私もこんな嫌なことをと痛切に感じていたが、護国寺の墓地を歩いていると墓の陰で中学生が泣いている。どうしたんだ、と聞くとその子は印刷工場の息子で、活字がカマスの中に入れられるのを見て泣いたと言う。工場では泣けないから墓地へ泣きに来たという。これを聞いて私は、労働運動というものは人間を極度に愛し極度に憎まなければ出来ない仕事だと言うことを痛切に考えて、組合運動から徐々に身を引くことになった。

大杉栄の運動は無政府共産主義運動という看板だから、これは街を歩くだけでも引っ張られる。なんで引っ張るかとなると、君の顔は秩序紊乱をする恐れがある、というようなことを言う。またこっちも検事の前へ出て、椅子を逆にして背もたれに腕をかけて応答する。どんなに重くても3年以上は食わないことを知っていて、死刑にしてくれよなどと言ったりしたが…。

労働運動をやっていた時からしょっちゅう留置場へ入ったが、その頃は行政執行法という法律があって、検束しても暗くなるとささなければならぬ。日の出から日没までしか検束出来ないということで暗くなると出してくれるが、警察の門を出て5、6軒行くとそこで待っていてまた捕まえられる。検束29日で、29日間それを繰り返すわけである。そういうことばかりやっていたから、私も留置場慣れして、警視庁の留置場などへ行くとチリ紙と手拭の糸で豆ワラジを作る。コヨリでワラジやゾウリが出来るというのは一度や二度入ったものでは出来はしない、それで監房の中で威張っている牢名主のようなやつに座れるようになる。出たい出たいの一心で作るワラジと言われるが、これが出てくる時には20足ほどになる。これを同じ「出たい出たい一心」の女郎や芸者に売りに行って2、3足で3日ぐらゐ泊まってくることも出来た。



(5) 居残り左平次

その頃、活版工と床屋の職人が一番博打（ばくち）が上手かったと言える。床屋の職人の数より活版屋のほうがずっと多いのであるから、当然活版屋が目立って博打が上手いという定説になる。そういう道楽者がたくさんいたということに即して、粋な人間が多かつ

たということもまた言えるわけである。古典落語の中に「居残り左平次」という話がある。金を持たないで芸者をあげてどんちゃん騒ぎをし、皆を帰してしまい1人残って居残り左平次を知らないかと啖呵を切るという話であるが、それを地で行くような奴が活版屋の中にはたくさんいたものである。どういことをするかというと、10人くらいで吉原へ行くとき、なかに3人ほど未青年を連れて行く。その頃の法律だと、未青年を上げるとその店は1週間の営業停止になるということだったが、その点に目を着けたのである。最初チップだけ払ってあとは金を出さない、それで勘定のときに無銭飲食で届けろと開き直るのである。その変わりこいつとこいつはまだ18なんだから、1週間の停止を食うぞ、とそこへまた脅しをかける。それで15円の勘定を5円ぐらいに値切って出てきてしまう。そういうことをする連中はレンガ（銀座周辺）、芝、山手どこへ行ってもいたのである。そのように活版屋には道楽者が多く、「飲む、打つ、買う」という言葉は、活版屋の職人のため設けられたと思って思えないことはなかった。

衆議院の速記記録は、この頃神田の印刷局でやっていたが、議会のある2ヶ月間で800円から千円ぐらい稼ぐやつがいた。私も一度見てきたが、呆れたのは使いの子どもを呼んで「俺のポケットからたばこを出して口にくわえて火をつける」と命令していたことだった。つまり自分でたばこを出してくわえて火をつける間に20本くらい拾えるからそうさせることだった。大体午後4時頃から原稿が出て、翌朝の4時頃までやる。多い人間で7、800円稼ぐのだがそういうやつは大抵女郎屋に下宿していて、朝になると車でそこへ帰る。だからそういう良い稼ぎをしてもあとに残ったのは淋病だったというようなことだが、それでも平気な顔をしていた。

満州共同印刷を作ったのは昭和7年であるがこのとき「共同印刷満州支社」という看板を立てた。すると東京では大橋さんが勝手に名前を使われては困ると言う。困ると言われても共同印刷満州支社という固有名詞だということで通してしまった。機械は送られて来たが、それが倉庫の中に入っていた機械だから、B全の機械が5台来ても、組み立てると2台くらいになってしまう。あとはあっちが足りない、こっちが足りないという代物。そういうものは奉天の泥棒市に持って行って売り払ってしまうということだった。儲かるようになり、改装しようということになると大橋さんも折れて「満州共同印刷株式会社」になった。

その頃、北京の近くの通州に蒋介石に反対した防謀自治政府が出来、これは元々日本の関東軍の出店あたりで作った傀儡政権取らな



かった。税金を取らないのはいいが、費用をなんで賄ったかという
とコロ島あたりの税関を重くして取り立ててやっていた。それで非
常に評判が良く、また善隣友好というモットーを掲げていたので善
隣友好の教科書を作ろうという話があった。それまでは蒋介石の手
で排日教科書が作られていたが、これは数学にまで及んでいて、向
こうから日本の飛行機が何機飛んで来たか、そのうち何機落とせば
何機になるか、というような内容であった。それを善隣友好を建前
とした教科書にしようということで東亜文化協会が出来たわけであ
る。

(6) 新民書館

昭和 12 年 7 月 27 日にロシア軍と関東軍が危うく衝突しそうに
なったという満州事変が起こったが、私はその頃政府に簡単な印刷
局を作ってくれと頼まれていて奉天から通州へ技術者を連れて来て
いた。ところがモーターのサイクルなどが違うためぐずぐずしてい
て、また連れていった支那人の技術者がやくざのとんでもない職人
で、日本人はどこでも使わないというやつだった。それでもどうい
うわけか機械の組み立てが上手いというので連れていったのだが、
なかなか仕事は捗らなかった。

7 月 26 日の夜、その支那人の職人がしきりに私に北京に帰れと
いうことを言うのである。俺はまだ引き渡しが終わっていないから
帰れない、と言っても帰れ帰れとしきりに言う。お前はどうするんだ、
と聞いたところが、俺は支那人だからいいが先生は日本人だから危
ない、とそういうことを言う。私も変だなと思い、どういうことか
わからないが、結局その晩に北京に帰ってしまった。

その翌朝通州事変なるものが起きたのだから、危なく命を拾った
わけである。

通州事変の後、もう一度行ったが、錦水桜などという家は女が一
番殺された所で、あちこちに血と毛と着物がこびりついていて見る
に耐えない状態であった。人間は死ぬ際になると父親のことより母
のことを思い出すらしく、手帳に鉛筆で「銀行に 500 円預けてある」
と書いておいたその上に「お母さん、もう駄目です」などと、たど
たどしく綴ってある。それを見たとき私は、つくづく母の偉さとい
うようなものを感じた。



そのあと、北京の新民書館の計画が出来た。下中先生という人は偉い人で、当時京橋に東亜印刷というのがあり、そこの専務をしていたが、本社は、旅順にあった。東亜印刷はポイント活字が出来たとき、一番最初にこれを採用したというほど活字に関心を示していたが、下中さんは私に、平凡社が新民書館に払う金として10万円あるからこれで活字を作ってくれ、ということを言われた。私はその10万円で自動鑄造機を2台買い活字を作ったが、そういうことで新民書館が出来たときには活字はすでに用意されていた。これには井上さんも驚いていた。

井上さんについては一つエピソードがある。治安維持法が出たとき、私はその反対運動に立った。私は行かなかったが、凸版印刷の前で反対運動に参加せよ、というビラをまきに行った連中が、人数も少なく若いものが多かったので、守衛に袋叩きにあってしまったということがあった。治安維持法反対のデモが上野で解散した時が5時で、まだ時間が早いというのでタクシーで下谷の凸版印刷まで駆け付け、またビラをまいた。ビラは2、3人でまいてあとの連中は隠れていて、守衛が出てきたとき一斉に飛び出して守衛を捕まえた。傷つかないように殴れ、ということで殴ったんだが、その時の守衛が井上さんの知り合いだったようである。あとで井上さんと話したとき、どうもそうらしいと大笑いになったことを覚えている。そしてまた新民書館で井上さんと一緒になったんだが、支那の法律では8時間労働ということが決まっていた。守られてはいないが、条文だけはある。これでは違法になるが、と井上さんに言われたが、支那の法律なんかどうでもいいから10時間働けと私が答えると、井上さんにはお前も変わったもんだ、と言われたが……。

(7) 東京印書館

昔の経営者のほうが人間に潤いがあったということを感じる。コバステップを考案した小林君が、奉天に相互オフセット印刷という会社を作ったことがあった。そのとき古い機械はあったが、もう2台機械が足りない。しかし銭は無いというので、浜田の先代社長に出世払いの交渉をしたらしい。浜田社長も太っ腹の人だったから、出世払いでいいと金を出した。社長は随分小林さんに惚れ込みましたね、というと、新橋の芸者に惚れれば5万や10万のお金はすぐなくなるのに、男が男に惚れてオフセット機械2台くらい安いものだ、と言っていた。



終戦のときには私は北京に残り、皆が引き上げるまでみていたが、その頃会社では紙幣を刷っていた。500円の紙幣をB全で刷るものだから、80枚ぐらいつく。それに一枚一枚ナンバーは入らないから記号をつけて刷っていた。だからそのままですぐに使えたが、お陰で、終戦のときには憲兵にピストルを突き付けられたりした……。

しかし戦後のインフレが激しく、インドあたりで印刷して紙幣を用意していたが、どうしても足りない、ということで、もう一度刷れと言われ再び始めたわけである。札というのはヤレを出している分には構わないが、盗まれたとなると定価通りに弁償しなければならないから大変なことであった。

戦後にはどこの工場でも工場長やその家族が迫害を受けたが、私どもだけは受けなかった。というのは株の配当金はどうせ政府の金であるから要らないから、その分を従業員の待遇に回すという社長の方針があったからだったと思う。工場は城外にあって、終戦後は日本人はとて城外には出られなかったが私どもは残業までしても迫害は受けなかった。それからもう一つは、私が労働運動をやっていた経験から生れたんだが教科書を作っても、その教科書が将来使いものにならないことははっきりしているのに、機械をあけて、遊ばせて危険な相談をされては叶わないと、より以上に教科書をどんどん印刷したことである。奨励金を出し、徹夜までやって印刷したものだから相談している暇はない。だから他の工場のようにストライキや暴行なども起こらなかった。とにかくどこの工場もみな止ってしまったのが、私どもの工場だけが使いものにならない教科書を刷らせていたお陰で、一つも争議というようなことが起こらなかった。

引き上げ後、米軍司令部に押えられていた機械を引き取り、東京印書館を作ろうと思ったのだがその機械払戻しの入札の時にも私は悪知恵を働かせた。入札の検査官に10万円小遣いを渡して確実に落ちる金額を書いてもらいそれで落とし、翌日自分で書き直して持っていった。検事局に呼ばれて質問されたが、私の字に間違いはない、ということで発覚せずにすんでしまった。20何年も前のことだからもう時効だろが……。

東京印書館は特色のある会社になりたいと思い、下中先生に相談し写真植字機を見せたところが、これがいいからこれでいこう、ということになった。そういうことで平凡社の第1回の百科事典は単式でやった。その頃、単式は印刷会社からは、素人の使うものだと相手にされなかったのを、あえて単式で百科事典を作ったのである。



そのあと写植を使ったわけである。

東京印書館はそういうことで「活字のない印刷所」というキャッチフレーズがついた。

(8) 経 営 者

昔は新聞社の工場で働く人間と、町の印刷所で働く人間ははっきりわかれていて、町の印刷屋で働いている人は臨時屋と言っていた。さっき話した第2回目のストライキの時には「万朝報」—これはその頃は三木さんという人が社長で石川さんが編集長をしていたが—その時に交渉に当たったのが私であった。その頃の新聞社の労働条件というのは朝10時に出てきて夕方5時に帰るのと、夜の12時に帰る2通りがあって、月のうち半分くらいはその“残り”というのをやったんだが、それを全部朝9時から夕方5時までと、6時から10時までの2部制にしようと話したのである。石川という人は新聞記者としては有名な人であるが、普通常識で考えて人間を倍にしなれば出来ないのではないか、ということ言う。いや、人間を倍にまでする必要はないが、今の人間に1割くらい増せば出来るんだ、と言ったところが、結局1割も増やさないで8時間制が日本の印刷工場ですべて実施された。

ところが情ないことに、今まで朝10時に出ていって晩の12時に帰ったのが、夕方明るいうちに帰るといふことになる、小遣いがいってしょうがないということを出す。それで夜勤の者は昼、昼の者は夜よその工場に働くという“二足のわらじ”をやるようになった。「そういうことをやっている者は、われわれの敵と思う」といふようなピラを東京中にまき、二足のわらじ撲滅運動をやったが、色々な矛盾の中でようやく勝ち取った8時間制を目の前で踏みにじられることには本当に腹が立っていた。

昔の人はなるほど労働者に対して厳しいところはあっても、その底には暖かいものが流れていたということも言える。「あいつは憎いやつだけれども、俺のところの工場に働いているんだ」ということがあり、最近の、金さえ儲かればいいというパチンコ屋的経営者とは随分違っていたように思う。鉛毒の問題などについても、星野さんや大江さんがずっと昔にお世話になった印刷の人たちとは全然違った、いわば第三国人的な要素のある印刷人がこの頃では多くなった、ということを感じる。



米騒動の時に新富座の前に演説していたのが大杉栄であった。ドテラ風のものを着て演説している大杉の姿は強く印象に残った。そして新聞社のストライキで横山勝太郎に逃げられ、あのような幹部では労働運動は発展しない、と考えたことが私が労働運動、その後の思想運動に入る動機になっていたように思う。

大杉栄は無政府主義者であることには変りないが、スケールの大きい人間であった。無政府主義だけにとらわれることなく、法律よりも道徳は一生つきまとうものであるから、そのように考えると無政府主義が嫌になる、というようなことを口癖のように言っていた。

私自身も様々な変遷を辿ってきたが社会の矛盾を解決するための労働運動が、しばしば「人間を極度に愛し極度に憎まなければならない」という人間に対する矛盾した関係を生み、離合集散の過程を経てきたように思う。

「民衆の旗、アカハタは戦死の屍を包む…」という赤旗の歌が象徴するように、それらの憎愛を赤旗(ローテ・ファーネ)は一切包み込み、ある時は血と泥にまみれて屍と共に葬られ、そしてまた、ある時は青空に翻っていたのである。

